

これからの貴女へ

京都通信病院小児科 大内 能子

拙い記憶をたどると大学1年の時、女子4人一緒に自主休講をしたことが有りました（当時は医学部に入学して2年間は教養部で2クラス構成：各50人うち女子は各5名）。その時、担任の先生が「君たちは税金を使って勉強しているんだから、さぼるとは何事だ！女子は結婚して家庭に入るなんてとんでもない。医者を続けなさい」と説教されました。“ふ～んそうなのか…”

小説「ガン病棟」を読んだ時。“ロシアでは女医さんの占める割合が多いんだ”

麻酔科のポリクリで助手の素敵な女医さんに出会いました。噂で「N先生はお子さんを東京の実家に預けているらしいよ」「子供がいるって大変なんだな”

小児科に入局し大学の医局で上の男の先生たちが噂話をしていました。「O先生は、世話をする人がいないので子供を自分の病院に連れてきて、診療をしていたそうだよ、頑張るなー」

“そんなやり方もあるんだー”

結婚を機に北海道から京都に来て以来、現在の病院に勤務しています（30年余が経ちました）。翌年に長男が生まれました。3人いた小児科医が、5年後には私独りになり（3人目が1歳の時です）、外来&入院の診療をし、当直もこなし、3人の子供を育てました。主人は消化器外科医なので、殆どいわゆる母子家庭？の状態だったと思います。遠方より実家の母がよく手伝いにきてくれました。病院が当時はゆっくりした環境だったので出来たのでしょうか？過ぎてしまえば、子育ての時期をどのようにして過ごしていたか思い出せません。懐かしい思い出だけが折に触れ、頭に浮かんできます。母親と小児科医の代理はいないので体調管理にはかなり気を使いました。又、がんばりすぎてしんどくなった時は多少のことには目をつぶり一休さん々と唱え肩の力を抜きました。

これまで出会った方々に支えて頂き、今日まで来られたと感謝しています。小児科の大先輩が「診た子供が親になってその子供を診せに連れて来た時、小児科医名利に尽きる」と書いたのを読んだことがあります。

私もそのような年齢になって来ました。

これからの貴女へ、何かお役にたてばと思い筆を執りました。

（2013年1月記 所属はホームページ掲載時）

【著者略歴】 大内 能子 (おおうち よしこ)

北海道大学医学部卒業

～男女共同参画推進委員会より～

「女性医師数について」

厚労省によると、全医師数に占める女性医師の割合は平成24年時点19.7%を占めますが、特に小児科や産科では30%以上という高い値を示しています。文科省によると医学部入学者に占める女性の割合は約3分の1 となっています。現在、ワークライフバランスに配慮して女性医師が働きやすい職場環境の整備のあり方が、各組織で問題となっています。

皆がバランスよく働き、そしてキャリアを積むためにどうしたらよいか、このようなワークショップを今年の日本小児科学会学術集会でも男女共同参画推進委員会が企画しました。昨年開催して好評でした「先輩に学ぶキャリアの積み方・活かし方～subspecialty を考える～」第2弾です。先輩方がこれまでどう働いてきたか、各々がこれからどう働いていけばよいか、聞いて話し合う中で何かが見つかる会になればと思っています。